主日礼拝説教「孤立？束縛？いいえ自律」予稿

日本基督教団石神井教会　2023年5月7日

【旧約聖書日課】申命記　7章6～11節

6あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面に
いるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。7主が心引
かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多か
ったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。8ただ、あ
なたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られた
ゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、フ
ァラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。

9あなたは知らねばならない。あなたの神、主が神であり、信頼すべき神で
あることを。この方は、御自分を愛し、その戒めを守る者には千代にわたっ
て契約を守り、慈しみを注がれるが、10御自分を否む者にはめいめいに報い
て滅ぼされる。主は、御自分を否む者には、ためらうことなくめいめいに報
いられる。11あなたは、今日わたしが、「行え」と命じた戒めと掟と法を守
らねばならない。

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙　3章23節～4章7節

３ 23信仰が現れる前には、わたしたちは律法の下で監視され、この信仰が啓
示されるようになるまで閉じ込められていました。24こうして律法は、わた
したちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰に
よって義とされるためです。25しかし、信仰が現れたので、もはや、わたし
たちはこのような養育係の下にはいません。

26あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なの
です。27洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着て
いるからです。28そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自
由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イ
エスにおいて一つだからです。29あなたがたは、もしキリストのものだとす
るなら、とりもなおさず、アブラハムの子孫であり、約束による相続人です。
４ 1つまり、こういうことです。相続人は、未成年である間は、全財産の所
有者であっても僕と何ら変わるところがなく、2父親が定めた期日までは後見
人や管理人の監督の下にいます。3同様にわたしたちも、未成年であったとき
は、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました。4しかし、時が満ちると、
神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしにな
りました。5それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の
子となさるためでした。6あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父

よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。7ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　15章12～17節

12わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。13友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。14わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。15もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。16あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。17互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」

「互いに愛し合いなさい」【こども説教のために】

主イエスがご復活して現れてくださることを知るようになった弟子たちは、「主イエスは生きていらっしゃる」と信じて、これからも主イエスと共に、主イエスが歩まれたように生きていきたいと願い始めていました。そこで、弟子たちが互いに語り始めたのは、かつて主イエスがお教えくださった教えの数々でした。主イエスの教えを思い起こし、互いに確かめ合うほどに、主イエスが今も生きて共に歩んでくださることは、ますます確かなことのように思われたのです。

「**互いに愛し合いなさい**」。主イエスが繰り返しお教えくださっていた「愛の掟」です。ただ、どのようにしたら互いに愛し合う関係を作ることができるのか、弟子たちには分からないところがありました。けれども、主イエスが十字架の上で死なれた今は、分かります。「**友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない**」とおっしゃったのは、大袈裟でも何でもなかったのです。「**あなたがたはわたしの友である**」と言ってくださった主イエスは、弟子の自分たちを愛するために命を差し出してくださったのだと、弟子たちにも分かったのです。

主イエスがどれほど愛してくださったことか。十字架で死なれるまでの命、人生の日々を、主イエスは惜しげもなく差し出してくださった。ならば、これからは、自分たちの命、人生の日々を、友のために、隣人のために、神の愛されるすべての人のために、差し出して生きよう。死ぬまで、そうして生きよう。弟子たちの心の中に、新しい決心が与えられていたのです。

たとえ離れていく「友」であっても

連休中に参列した身内の結婚式で、牧師として司式をいたしました。式を挙げる二人がご自分たちの思いをしっかり形にしたいと、わたしに司式を依頼してくださったのです。準備期間はとても短かったのですが、真摯に向き合って作り上げられました。お二人が選んだ讃美歌の中に、こういう歌詞がありました。「*試練の嵐に出会ったときこそ、互いに受け入れ心を開こう。互いを引き裂く痛みの中でも、よみがえる愛を信じて祈ろう*」(『讃美歌 21』104「愛する二人に」3 節、4 節)。結婚式の讃美歌と言えば、夫婦の愛を称賛し、愛し合う二人はどんな困難に遭っても互いに手を携えて乗り越えていくことができると、永遠の愛を高らかに歌うのが定番です。けれどもお二人は、むしろ互いに対する愛に危機が訪れるときに、なおそれを乗り越えていく道があることを信じて共に歩んでいこう、と歌う讃美歌を選ばれたのです。

わたしは、この二人がキリストに選び出されたのだと思いました。二人は、出会いを通して互いを選んだのですが、本当は、キリストが選び出して、夫婦となるように結び合わせてくださったのです。そうでなければ、式に臨むにあたって、お二人にあのようなキリストの心を歌う讃美歌が与えられることがあったでしょうか。

主イエスは、最後の晩餐の席で、弟子たちに繰り返し「**わたしがあなたがたを愛したように…互いに愛し合いなさい**」(13:34) と命じられました。そのとき主イエスは、分かっていらっしゃいました、その晩のうちにご自分が弟子の一人に手引された者によって捕らえられることを。他の弟子たちも離れて行ってしまい、翌日には十字架につけられるであろうことを。それでも、主イエスは、彼ら弟子たちに向けて、「**あなたがたはわたしの友である**」、「**わたしはあなたがたを友と呼ぶ**」と、繰り返されたのです。裏切り、離れていくことが確実な者たちを、なお「**友**」と呼ばれ、「**友のために自分の命を捨てる**」とおっしゃられ、そのようになさったのです。たとえ彼らが裏切り、離れて行ってしまう者であっても、「自分が命を捨て、人生の日々を差し出して、愛し続ける友」であることに変わりはない、と。

主イエスが「**互いに愛し合いなさい**」と命じられたとき、実際になさったことは、少しも「互いに」ではありませんでした。一方的に「**わたしがあなたがたを愛した**」。それが事実でした。ですから、主イエスの命令は、本当はこういうことです、「一方的に互いを愛しなさい！」。

主イエスは、ご自分が一方的に愛する相手を、選ばれたのです。「**あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。**」決心して、選ばれたのです、愛する友を、愛することを。この愛が実を結ぶことを信じて。その実が残り、新しい愛の実りを結ぶようになると信じて。

御父に願う、ということ

20 年度ほど前、「きみは愛されるため生まれた」というゴスペルソングが韓国の教会から紹介され、広く知られるようになりました。日本で毎年の自殺者数が 3 万人を優に超えていたころのことです。「*きみは愛されるため生まれた、きみの生涯は愛で満ちている*」と歌うこの歌は、静かに、しかし広く知られるようになりました。人に愛されることを知らずにきた者、愛に飢えている者に、この歌は大きな慰めとなったのに違いありません。

けれども、わたしは、主イエスならばそのようには歌われなかったのではないか、とも思うのです。むしろ、「きみは*愛するために*生まれた」と歌われたのではないか、と。

わたしたちは、実のところ、自分がどれだけ周囲の人に愛されてきたのか、よく分かっていないものです。分からないから、それを確かめようとしたりします。どれだけ愛されているか測らずにいられなくもなるのです。ですから、「きみは愛されるため生まれた」というフレーズは、慰めになることもあれば、かえって人を苦しめることもあるかもしれません。その「愛」をどうしたら確かめることができるだろうか、と。

初代教会の宣教者パウロは、主イエスの「**受けるよりは与える方が幸いである**」（使徒 20:35）という言葉を伝えています。この言葉を、「愛されることよりも、愛することのほうが幸いである」と言い換えても許されるのではないでしょうか。自分がまず相手を愛する、ということから始めるならば、相手の愛を確かめることから始めるよりも、少しは葛藤が少なくなるように思えます。それでも、わたしたちは、「これだけ人を愛したのだから、それ相応に自分も愛されたい」という思いを拭えないものなのかもしれません。

主イエスは、「自分を捨てて」とおっしゃいます。「自分の命を捨てて」とまでおっしゃいます。そこには、「愛されることへの欲求」を捨てることも、やはり含まれているのでしょう。そうであればなおさら、主イエスは、「あなたは愛するためにこそ生まれてきた」とおっしゃるに違いない。

もちろん、主イエスが「あなたは愛するために生まれてきた」とおっしゃられたとしても、わたしたちに、「**友のために自分の命を捨てること**」は難しいことかもしれません。でも、それは、主イエスであっても同じだったのではないでしょうか。だからこそ、主イエスは、愛すべき友にさえ期待することをなさらなかったのです。ただ、御父である神に期待し、願われたのです。

「あなたがたもそうしなさい」と、主イエスは言われます。「わたしの友であるあなたがたは、御父に願うことができる」と言われます。死に至るまで「愛」に徹するつもりならば、ただ神に期待するのです。そこから新しい愛の実りが結ぶようになることを、ご復活の主イエスはご覧になられています。